

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第104号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)1月16日 土曜日

2021年(令和3年)1月16日 土曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、67歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を発掘した映
像」の【奪われた古代鉄王
国】の崎上映会は延期。乗
りて越奮文を日
のい新4作目制作に代れた
え中趣味は古もと東北か
えて研究。埋もれた東北
掘すこととを標榜。



今年、大震災から満10年を迎える！

『コロナ禍幻想から覚める東北が見る初夢はどんなものだろうか？』

初夢



日本全体を覆うコロナ禍
一色の「景色」は、昨年二
月から始まって、もうすぐ
一年になるのかというこの
年明けにもまだ続いている。
少しは改善の兆しが見え
るかと思いきや、どんな
事態が混乱の度を増してき
ていると痛切に感じる。

いや、もう救いようのない地点まで来てしまったとも感じるのだ。
もちろん、コロナウイルスによる感染蔓延も心配の種ではあるが、それ以上にこの国の不甲斐ないありさまを見せつけられて愕然とする場面が多すぎるのがよほどショックが大きいのだ。
つまり、国内のPCR検査によって判明した「陽性者」の増加、ウイルスに侵された死者数増加の事実も、日本と比べたらケタ違いに多い「陽性者」、「感染者」、「死亡者」を出してしまつた他の国々よりも右往左往する日本のありさまを見るにつけ、気が滅入るばかりなのである。

まず、「国の司令塔」は一貫性が欠落し、行き当たりばつたりの方針だらけであること、緊急事態を迎えた場合のリーダーたちの「率先垂範」も欠落している、国民だけに「自粛」を押し付け、自分たちは例外だとして平気で言う場面をたくさん見せつけられたこと、また、国と都道府県の責任のなすり合いは目に余る、「専門家」という人種のいかがわしさもいやというほど見せつけられたし、「専門分野以外」はどうでもいいという偏った発言ばかり、マスメディアは本心に国民のことを考えているのか、国民を煽って視聴率を稼げばいいのかという疑念がどんどん膨らんでいく流れ、他方、アルバイト等の若年層女性が職を失つてこの先を悲観しての自殺者が増加している現実などを見せつけられ、それに手を差し伸べない国の姿勢などに落胆するばかりの十一月であった。

この国の崩壊状態はこれからもしばらく続くのである。国民はただ耐えなければならぬ。事態がどれほど悪化しようが耐えなければならぬのだ。
「自粛生活」に耐えるとともに、国の崩壊をこれでもかと思えつけられる拷問のような苦しみにも耐えて、かつ、正当な怒りも発散してはならないのだ。
「東北」はどう対処すべきか
コロナウイルスに関する「データ」で見ると限りにおいては、東北は大都市圏とは比較にならないほど、小さな影響しかない。
とはいえ、全国一律のTV放送に毎日接しているとこの「実情」が改ざんされるのである。
まるで、この国がコロナウイルスですぐにでも消滅してしまうように思いこませる「洗脳状態」に導かれていると思うのである。
それは日本の大都市圏もそうであるが、東北もそうなのではないか心配である。そうならば、話は別だ。
一時、日本のTVなどは、重篤なウイルス感染者があふれかえる海外諸国の緊迫した救急病棟とその患者の映像を頻りに流し続け、日本も近々そうなるぞと脅かし続けているので、事実とは異なる「妄想」、「幻想」におびえるように誘導されていたのではないか。
視聴率を稼ぎだすための「過剰な演出」であろうが、明らかにやりすぎである。
しかし、日本の実情と違いすぎる状況を毎日見せられると、知らず知らずのうちに、それを「現実」と取り違えることになっていく。
もうこれは、「世論誘導」、「扇動」と呼んでも差し支

初夢・・・今年、アテルイかモレのような「救世主」は出現しないものか？



アテルイ想像図



モレ想像図

えないと考える。
これと同じことが、感染率に格段の差がある大都市圏と地方との間でも行われている。
東北は、この「世論誘導」、「扇動」に巻き込まれてはいないか、総点検が必要である。
東北は「妄想」から「現実」へ目を転じよ
もしも、万が一、東北が

この「妄想」とらわれ、「世論誘導」、「扇動」に巻き込まれていなければ、早々にそこから脱出すべきである。コロナ禍が終息してから脱出するのは遅い。
そのときは、この「妄想」、「世論誘導」、「扇動」によって破壊された東北の姿に直面することになる。
東日本大震災のときには現実起きた「破壊」に直面したが、今度は、「コロ

ナ禍による破壊幻想」がたちどころに消滅するともに、経済も雇用も企業活動も大きく棄損した現実に直面する可能性が広がっている。
コロナ禍に関して大都市圏よりはるかに有利
いますぐ、「コロナ禍幻想」から目覚めて、「現実」を直視し、有利な東北の状況に目を転じて、これをチ

東北の初夢

「救世主」現る！
 道州制実現・・・リーダーは北海道
 知事スカウト
 東北水産業は一変して、
 年収2千万円プレイヤー続出
 東北に若人が突如大量に流入
 東北からいきなり世界に打って出る
 ベンチャー続出
 東北がリモートワークの大拠点に！

世界の独立を目指す諸民族集会在東北
 で開催され、独立機運高まる

ヤンスとして、奮闘していき姿を少しでも早く見たいものだ。
 幸いなことに、いまは一部の動きにすぎないが、コロナ禍対策としてのリモートワークにより大都市圏から人が地方に移動し始めた。「火事場泥棒」との評価を気にして、この流れを傍観してはダメである。

また、コロナ禍対策としての「3密」が要請されているが、東北の主な中核都市を除けば、もともと「密」にはめったにお目にかかれない状態ではなかったか。例を挙げればきりがなが、山奥の温泉旅館で、「3密」対策を行って、顧客が大幅減少している状況を見て、この国は狂っていると感じたのは筆者だけではないはずである。

富士登山ではあるまいに、登山客も少ない山登りにマスクを着用する愚はいうまでもない。
 東北は、さつさと「コロナ禍幻想」から覚めて、しめるべきコロナウイルス対策を講じたうえで、早急に経済活動を活性化させるべきである。

早く目が覚めて、活動を開始する県が、今後、コロナ禍をうまく乗り切っていくことだろう。
 その点では、コロナ被害が最も小さな地方のひとつである東北がトップを走って欲しいと切に願う。

東日本大震災から十年目の今年は何か起きる
 今年も東日本大震災発生からもう十年である。依然として「不完全な復興」のみならず、この先、明るい展望が開けているとはとても言えない状況である。そこにこのコロナ禍であり、それをともに受け止めて、「幻想」に惑わされていては、「復興」はほとんど遠のいていく。

しかし、嘆いているばかりでは何も生まれない。発想を大胆に、かつ百八十度変えて、この局面を乗り越えて欲しい。
 そのためには、ネガティブ情報を一旦遮断することを勧めたい。

ネガティブな「仮想現実」を形成して、行動も消極的な防御の姿勢となる。これを大逆転しようではないか。
 筆者の記事は、東北を愛するあまりいつも叱咤激励調になってしまいが、新年にあたっては、ここからこれを止めよと思う。

そして、唐突であるが、東北全体で見る「初夢」を提案しようと思う。
 まずは、この難局を切り拓いていく強力で魅力的なリーダー登場の初夢である。かつて、アテルイやモレトという英雄が出現して大和朝廷と戦った。

最終的に敗れはしたが、圧倒的な軍力格差にもかかわらず戦いを挑んだリーダー。しかも、途中ではゲリラ戦術で、十万もの軍隊を退散させたのである。
 今年の東北に、こうしたリーダーは出現しないものだろうか。現代の東北の英雄である。

目を凝らして探してみると確かに存在している。
 筆者は、鈴木北海道知事を推薦する。

道州制論議復活

コロナ禍騒動の際に明らかとなってきた国と地方の関係。全国一律の施策の限界。中央政府よりも地元住民の信頼が厚い知事たちの存在などは、再び「道州制」

注意！

緊急事態宣言の影響により延期となりました！延期後開催時期未定

埋もれた歴史発掘シリーズ第二弾
 【奪われた古代鉄王国】
 の上映会（宮城県大崎市）

上映予定としていた会場：宮城県大崎市生涯学習センター（パレットおおさき）多目的ホール
 上映予定の日時：2021年1月23日(土)
 上映開始の予定：14:00

DVD は引き続き販売中
 -3300円(税込) 送料無料

問合せ先：株式会社遊無有
 mail : y.s.yumuyu@ozzio.jp

それだけではない、たくさん夢を見られる！

「東北の初夢」はそれだけではない。ほかにたくさんある。

まず、東北水産業の再活性化である。

若者の参画、企業の参画、水産業ベンチャーの林立などで、状況は一変して、年収2千万円プレイヤーの水産業従事者が続出するという初夢はどうであろうか。

かつて夢に終わらせてはいけない。基本的な条件は揃っている。あとは挑戦である。

ついで、リモートワークをさらに洗練されたシステムに仕上げた結果、東北に大都市圏から若人が突如大量に流入するという初夢はどうだろうか。

これも十分に可能性がある。当然ながら、東北がリモートワークの大拠点になるという初夢もあるが、これは夢ではなくなりつつある。挑戦することだけが課題である。

また、東北からいきなり世界に打って出るベンチャーが続出するという初夢はどうだろうか。

大都市圏がコロナ禍で傷んでいる間に、大都市圏市場をスキップして、世界に打って出るベンチャービジネスである。

このように「東北の初夢」はほとんど広がっていく。単なる夢に終わらないようにしたいものだ。

そのためには、当新聞が以前から主張しているように、若者・よそ者を快く受け入れることが必須条件である。そうなれば夢を引き寄せることが十分可能になる。



第77回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

《イクラ醤油漬け》

丼に乗せて召し上がって
いただくだけでも充分で
すが、適当なお刺身を一
緒に盛り合わせるとさら
に美味い



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料— 生イクラ 500～600g、みりん 250cc、酒 250cc、醤油 250cc、昆布 5センチ
—料理方法— ① 筋子は70度のお湯を入れボールの中でさいばしを回してほぐす。（皮が剥がれて、アニサキス、臭みを取る） ② イクラをザルに戻し、塩振り、水で洗う。薄皮が浮いてくるので流す。もう一度塩を入れて、ザッと洗い流す。あとは、8回程水で洗い流すと10回目には綺麗になる。（もう塩は入れない） ③ ザルで水気を切っておく（15分） ④ みりん1：酒1：醤油1の割合にしますが、みりんと酒を鍋で完全に煮切る。 ⑤ 沸騰を止めてから、昆布5センチ入れて醤油入れ、冷ます。 ⑥ 水気を切ったイクラをタッパーに入れ合わせ調味料をヒタヒタに入れる。一晩寝かせる。 ⑦ 翌日水気を切って本漬けをします。1～2日で出来あがりです。

いったい何回目になるのだろうか？「三陸酒海鮮会」再開の夢、再び絶たれる！まことに残念。家飲みで東北地酒は味わえるが、“仲間たち”とは会えない。東北地酒とみんなの顔が目浮かぶ、会いたい！

【依然として第43回三陸酒海鮮会代替日程未定のまま】

昨年3月14日開催のはずだった第43回目の三陸酒海鮮会からすでに10か月も経ち、年をまたぐことになりました。かつ、依然として代替日程が未定のまま推移しております。・・・美味しい東北地酒への恋しさが狂おしいほどに募っておりますが、それまでは以前の写真画像のみで何とか耐えてください。再びお会いできる日を楽しみに！

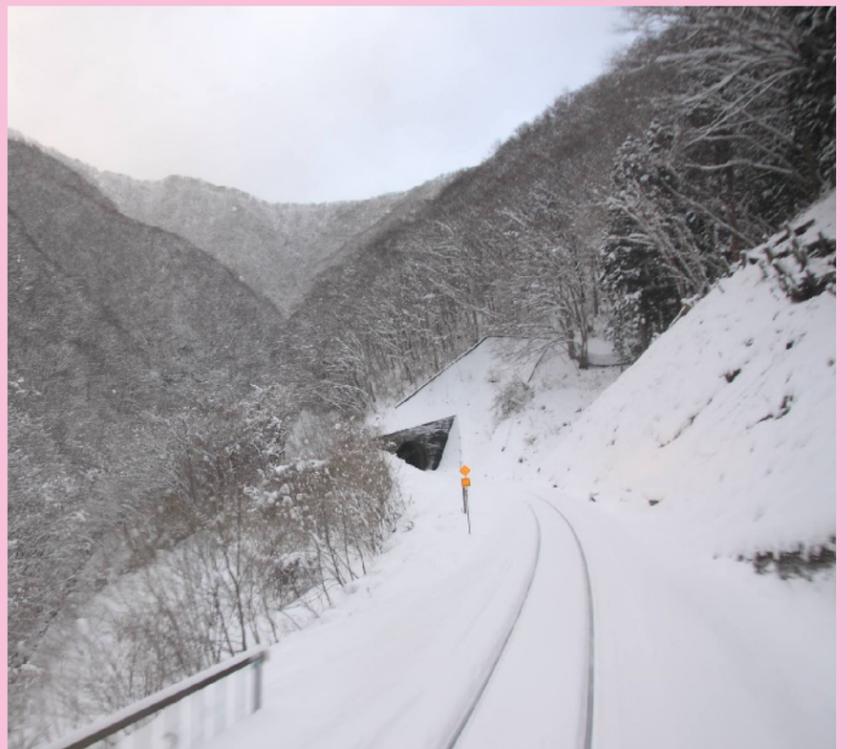
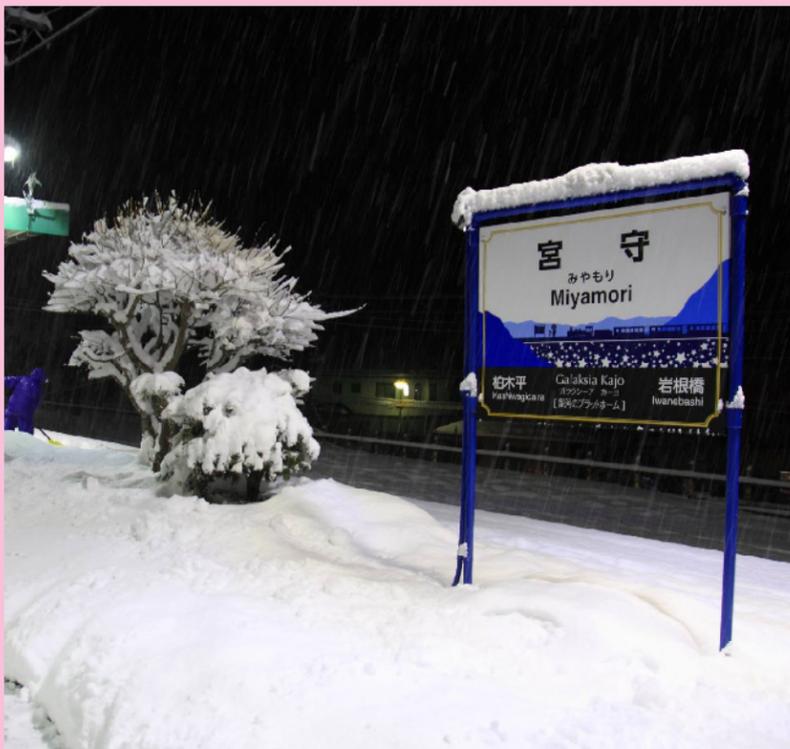




写真で
お伝えする
東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群
「対応薬⑧」

写真撮影
尾崎匠



環境再生型農業を この東北の地で

パタゴニアが手掛けたクラフトビール

つい最近、アウトドア用品のパタゴニアがクラフトビールを販売していることを知った。二種類あり、二〇一七年に誕生した「ロングルート・ペールエール」と、二〇一九年に追加された「ロングルート・ウィット」がパタゴニアの各店舗で販売されている。

このビールはとても興味深い。普通、ビールは大麥の麦芽、ホップ、水、酵母それぞれにビールによっては様々な副原料で造られるが、このパタゴニアの二種のビールには「カーンザ」という作物が一パーセント使用されているのである。

カーンザという作物の存在はこれまで全く知らなかったが、アメリカで二〇年ほど前に小麦の芽から開発された新しい作物であるらしい。その特徴は多年生であることである。

我々が普段口にしてる穀物、米を始め、小麦、大麦、とうもろこしなどは全て一年生の植物である。つまり一年のうち枯れてしまう作物であり、そのため毎年植える必要がある。元々これらの原種は多年生だったそうだが、品種改良の結果として一年生になったという。

執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブローグ」

http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

ところが、この、農業にとつてはあまりに当たり前とされている手続きが、どうやら地球環境にとつてあまりよろしくない結果をもたらしている面があるようである。森林を開墾することで植生による二酸化炭素の吸収量が減る。耕すことにより地中の有機物が地表に露出する。その過半は炭素でありそれが酸化することによって二酸化炭素が増える。一年生の作物の根は地表から浅くしか張らない。雨や水やりによって表土は流失し、地方の低下や水質汚染などをもたらす。

これに対して、多年生の植物の根は地中深く成長する。カーンザの根は実に地中三メートルもの深さにまで根を張るそうである。そして多年生であるため毎年耕す必要もなく、「不耕起栽培」が可能となる。掘り返されなければ土の中には多様な微生物が集まり、土壌が豊かになる。地中深く張る根はより多くの炭素を蓄えられる。

「カーボンニュートラル」を実現するために

菅首相は去る一〇月二六日の所信表明演説で、「我が国は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指すことをここに宣言する」と述べた。積極的に温暖化対策を行うことが産業構造や経済社会の変革をもたらす、大きな成長につながるという発想の転換が必要」とも述べている。そして、具体的な「脱炭素社会」実現の鍵として、「次世代型太陽電池やカーボンリサイクルなどの革新的なイノベーション」を挙げた。

「カーボンリサイクル」とは、経済産業省が推進している、二酸化炭素を炭素資源と捉えて再利用するという施策である。二〇一七年

の日本の二酸化炭素排出量は、世界全体の排出量の三・四パーセント、一・四億トンであり、中国、アメリカ、インド、ロシアに次ぐ五番目の多さとなっている。そこで、排出した二酸化炭素を活用する形で温暖化対策に取り組みするというのがカーボンリサイクル技術ロードマップ」が取りまとめられたが、その利用先としては化学品、燃料、鉱物、その他が想定されている。今後、その技術の確立、利用拡大、低コスト化を進めて二酸化炭素の排出削減につなげるというものである。

増加する二酸化炭素など温室効果ガスによる地球温暖化問題への対処方法として、菅首相が表明したように二酸化炭素の排出をゼロにすることが必要となるわけだが、その方法としてこのロードマップでも触れられていないのが、植物によって二酸化炭素を再び地中に戻す方策である。

元々なぜ温室効果ガスが地球上に増えたのかと言えば、産業革命以降、人類が石油や石炭という形で本来地中に埋まっていた炭素を掘り出して使い始めたからである。これを再び地中に戻すことができれば、地上にある二酸化炭素は減るわけである。その担い手として、多年生の作物が目ざされているのである。



パタゴニアが販売しているクラフトビール



黒小麦を使ったまぜそば

生植物は一年生植物に比べて格段に多くの炭素を地中に固定することができるという。世界中の耕作地をすべて多年生の作物による環境再生型農業に切り替えたとしたら、それだけで二酸化炭素濃度の上昇を抑制することができるという指摘すらなされているそうである。

このより積極的な環境再生型農業を、東北が主導して取り入れていってはどうだろうか。元々東北は蝦夷と呼ばれていた頃から、さらにはもつと昔、縄文の頃から自然と共生した暮らしの営みを続けてきた地である。今も自然の豊かさを実感し、それを守り、大切に受け継いできた地域が多くある。その姿勢をより積極的

に、守るだけでなく、よりよくしていくことに転じていくのである。そして、東北の地から、農業によるイノベーションを実現していくのである。

具体的にはカーンザのような多年生作物の新品種を開発することも必要だろうが、より手近には、現在栽培されている作物の原種の栽培にチャレンジするという方法もある。実際、小麦の原種と言われ、古代エジプトの頃から栽培されてきたというスペルト小麦を栽培している農家が滋賀にある。また、モンゴルの黒小麦は小麦の野生種と言われるが、これを栽培している農家も長野にある。この黒小麦を使ったつけ麺が食べられる店が山形市内に

ただ、この環境再生型農業、まだ日本ではそれほど本格的に着手されていないようである。それに連なるものとして日本では、農林水産省によって「環境保全型農業」の確立が目指されているが、これは「農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和などに留意しつつ、土づくり等を通じて化学肥料、農薬の使用等

環境再生型農業を東北から

このより積極的な環境再生型農業を、東北が主導して取り入れていってはどうだろうか。元々東北は蝦夷と呼ばれていた頃から、さらにはもつと昔、縄文の頃から自然と共生した暮らしの営みを続けてきた地である。今も自然の豊かさを実感し、それを守り、大切に受け継いできた地域が多くある。その姿勢をより積極的

に、守るだけでなく、よりよくしていくことに転じていくのである。そして、東北の地から、農業によるイノベーションを実現していくのである。

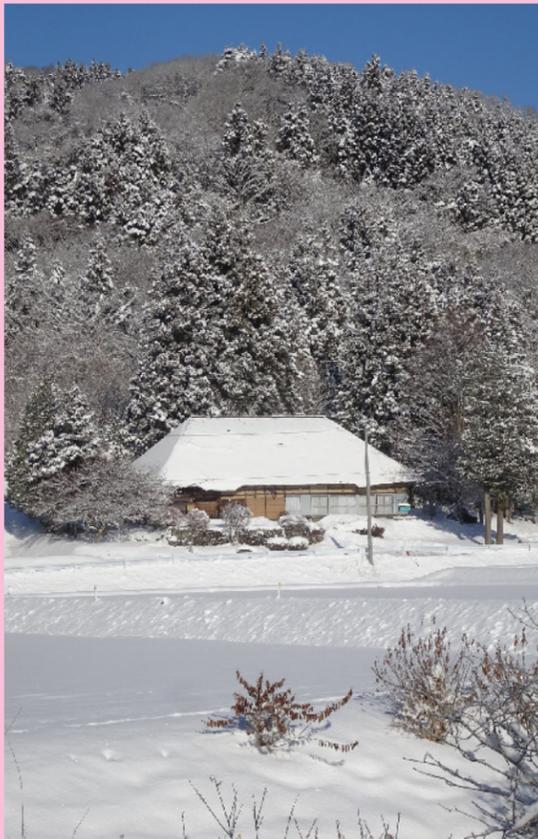
具体的にはカーンザのような多年生作物の新品種を開発することも必要だろうが、より手近には、現在栽培されている作物の原種の栽培にチャレンジするという方法もある。実際、小麦の原種と言われ、古代エジプトの頃から栽培されてきたというスペルト小麦を栽培している農家が滋賀にある。また、モンゴルの黒小麦は小麦の野生種と言われるが、これを栽培している農家も長野にある。この黒小麦を使ったつけ麺が食べられる店が山形市内に

シリーズ 遠野の自然

「遠野の小寒」

遠野 1000 景より

たしか、昨年の秋ごろまでは例年より暑くて、11月あたりまで暖かった。それはきつと地球温暖化のせいだと危機が叫ばれていたような記憶がある。それが一転して「ものすごく寒い冬」となった。なかでも遠野の寒さは尋常ではないようで、マイナス22度もあったようだ。筆者の住む東京郊外でも外部にある給湯器が凍結で壊れて取り換えることになった。まさかの事態だ。これだけ寒いならば、コロナウイルスも凍ってしまえばいいのと思うが、人体に潜むウイルスはしぶとく生き残る。なかなか厄介である。寒さの中の軟禁状態はまだしばらく続く。



厳冬冬晴れ



ノウサギの散歩道



雪中の鳥居



山間の集落



雪中の石塔



隣家のツララ



雨だれがつらら



ナンテンの実とツララ

宇宙時代の人間の死と進化 そして出羽三山の事

『2001年宇宙の旅』

というあまりにも有名な映画がある。実際の二〇〇一年はどの昔、二〇〇年も前に過ぎ去った過去だが、一九六八年に制作されたこのアメリカ映画の中の二〇〇一年は当時にとって三〇〇年も未来の輝かしいであろうと信じられた宇宙時代を当代一のSF作家の想像力とハリウッド最新技術の極致で描いた映像叙事詩であり、そのビジュアルと世界観は映画公開後何と五〇年を迎える事となったいま目にして驚くほどに新鮮である。

実際の二〇〇一年には作品の内容のように木星への有人旅行はおろか月面基地も人間同様の意識を持つ人



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

工頭脳も実現していなかったし、それはそれから二〇〇一年が経過した現在でも同じである。そのどれもが当然実現しそうで実際は難しいものであり、特に宇宙旅行や惑星移住といった事に関する課題・困難さが広く知られるようになった現代では、宇宙旅行を現実的な夢として描いている人はかつて程いなくなりました。それでも人々が宇宙に尚夢を見るのは、そこにいずれは解かれるべき深遠なる謎と未知が溢れているからだろう。だから今宇宙とは、多くの人々にとっては実際に赴く場所としてではなく、最新技術を込めた機器を打ち上げ送り出して実験・探究を深めるフロントティアとしてあるのだと思う。

しかしこれは決して一時的な新しい傾向ではなく、地球上に居ながらにして宇宙を探究するという歴史は人類の古代からの変わらぬ宿命のような気もするのだ。

英国のストーンヘンジ、日本の大湯環状列石などのストーンサークルや、南米ナスカの地上絵など、宇宙もしくは「天界」との交流を目的にしたと思われる史跡は少なくない。しかし一方で実際の天上を見上げるのではなく、地球上の大自然の中に人類はまた別の宇宙を見出していた。本稿では人間にとって永遠の謎である「死」と「宇宙」を、東北人が古代より投影し挑んできた地上の境界線に目を凝らし、自らと人類の未来に想いを馳せてみよう。

『2001年宇宙の旅』はアシモフ、ハインラインとともに20世紀における「ビッグ3」及びSF界の大御所の一人と称されるアーサー・C・クラークによって執筆された。確固たる科学的知識に裏打ちされたその物語のテーマは、「人類の次の段階への進化」である。かつて超古代、知性にも闘争心にも乏しく、滅びようとしていた無力な人類の祖先に、何らかの刺激を与えて進化させた宇宙からの謎の知的存在。その後数百万年の時を経て、進化させた者と、進化させられた者、両者が宇宙で再会を果たすのである。

20世紀末、月の地下から数百年前のものと推定される謎の人工物が発掘される。それはあたかも人類が月へ到達した事を何者かに知らせるかのよう、木星へ向けて電波を発信し始め、その解明の為に木星への有人宇宙船が発する事になるのだ。しかし原因不明の船内コンピュータの叛乱によって船員を殺された船長は単身、木星へ向かう。そこには太古の人類を進化させた外宇宙の何らかの巨大な意志生命体が出て、迎え

入れられた船長は木星の異空間における老衰と死を経験し、新たな段階に進化した人類の赤ん坊として生まれ変わるのだ。この「人類の新たな段階への進化」というテーマはクラークが前作『幼年期の終わり』『前哨』『都市と星』などで繰り返し追究してきたものであるが、本作では空想科学小説の範疇では捉えきれぬ死と再生に深く踏み込んでおり、またその描写はかの仏陀が悟りを開き常人とは違う高みに解脱する様子を想起させる為、特に日本人始めとする東洋の人々には強烈な印象を与えてきたのではないかとと思われる。作家クラークが仏教に造詣が深かったという事実は、かつて日本でも宮澤賢治が熱心な日蓮宗徒でありながら自らは文学者ではなく科学者であると自覚していた事を思い出させる。ニーチェが古典的論理性を認め、アインシュタインが近代科学と両立可能な唯一の宗教と語ったように、輪廻思想や「解脱」の概念を科学として現実的な物語に取り入れる事は決して矛盾ではないのかも知れない。むしろ人間は思考する事を始めて以来、死と宇宙をセットで捉えて対応する事で進化してきたと言ってもいいような気がするのだ。

自らが生きてる世界「宇宙」の実態への認識は古来、個人・民族で異なっていた。人里から遠く離れ容易に赴く事の叶わぬ場所―海の果てや山岳の上部は生きている人間が触れる事の許されぬ異空間、即ち驚異なる宇宙だったのである。その地は今生の只中にある人間が再会する事のできぬ存在―死者の赴く場所でもあった。日本であれば、国作りに関わった少彦名神や浦嶋子が渡ったとされる海の果ての常世の国や沖繩におけるニライカナイ、山岳ならば北陸の白山や東北の恐山、そして修験の一大霊場として西の熊野三山に對比されたのが、出羽三山であった。

山形県の出羽三山は数多ある日本の山々の中で何故多くの人々にとっての特別な領域となったのだろうか。よく知られる蜂子皇子の他、修験道の流派によって空海、役小角といった中央著名人による開基伝説が存在するが、信仰対象が自然物である事など仏教由来以前、おそらく縄文時代からの存在が伺える為、それらはいずれも新し過ぎる伝説と言えるかも知れない。とはいえ、羽黒山に現世の幸福を、月山に死後の安泰を、そして湯殿山に来世への希望を祈るといふ縄文期の環状列石にも通じるであろう死と再生への想いは、仏教にある輪廻思想に決して相反する事なく、それ故後にその開基伝説もとも仏教関連一色に染まる道を許したとも考えられる。

では、既に目前にある宇宙時代において、山海に宇宙を想定してきた人類古来の宗教観が崩壊したのかという、そう単純にはいかなかったのは実際の私たちが暮らしぶりからも明らかだ。それどころか、宇宙旅行を経験した宇宙飛行士の何割かがその価値観・人生観を変化させ、むしろ神の存在を確信して地球帰還後に牧師などの宗教家や神秘の世界を追究する芸術家になるケースが知られる。ただし興味深い事に、そのような事例は近年の国際宇宙ステーションなど地球付近で勤務する飛行士にはほとんどなく、約五十年前の有人月面着陸、月周回飛行など別天体から地球を眺める状況にあった者らに顕著であったという。実に不思議な話であるが、「月から地球を見る」という実際には想像し難い体験が、宇宙の無限さ・途方もなさを実感させる壮大なインパクトを人間に与え、その精神に何かを引き起こした、と言えるのかも知れない。

それは別天体から生まれ故郷の惑星を眺めるといふ途轍もない体験と同様に心に打ち込まれた、一種の臨死体験ではなかったろうか。『出羽三山神社』H.Pの「御由緒」によると、かつて関東方面から登拝する事は奥参りといって重要な通過儀礼と位置づけられ、貫徹した者は一般とは異なる存在、いわば神となる事を約束された者として崇敬を受けたという。これを見ると、まさに『2001年』における人類の新たな段階への進化そのものの姿のように思えるのだが、これが仏教以前から(仏教は神の存在を否定する)の伝統か否かはともかく、人間のこの「超人化」への「解脱」への、乃至まさしく「進化」への願望というものが人類の歴史始まって以来普遍的に有り続けてきたものであり、それはまた結局のところ一つの究極の願い「不死」に全て集束するものなのではないか、とも考えられるのである。

現代科学の最前線に生きる宇宙飛行士が神を信じざるを得なくなるほどの月面での体験と、出羽三山への入山の体験、この二つの共通点は何だろうか。月山や湯殿山の自然に分け入った古代人は、そこで死に直面するような苦難を体験したかも知れない。里にいれば経験する事のない感覚と、目にするべくもない光景。

間ではある。近年スマホが人類を進化させたという論調もあるが、これも私にはむしろ単なる集団中毒、悪くすると却って生物学的退化を引き起こす予感しかせず、結局宇宙進出や科学の進歩で為される進化というものが逆に想像し難くなってしまう気がするのだ。

悟りを開いた者が死ぬ事を、入滅という。これは正確には輪廻という苦、生死自体からも解放され自由の境地に達する事を意味するらしい。仏教が現代科学と両立する論理性を持ち、そしてこの入滅が究極の進化の終点であるとするならば、進化の為に実際の宇宙へ進出する必要はないのかも知れない。けれども、もっと進化という事を身近に考えるなら、それは個人で望み、挑む「成長」と、それに伴う「変身」に他ならない。

それはある人には勉学に励む事であり、肉体を鍛錬する事、芸術や職人技を極める事でもあるだろう。今も昔も、変わらない事だ。しかし、人間には死への

いかに最先端の宇宙開発がこの先進もとも、皮肉ながら我が東北の出羽三山の宇宙ほど、人間を進化させ得る場所は存在しないかも知れないという可能性も、私は空想科学してみたいと思うのである。



2021年、あなたの旅する宇宙は？(映画『2001年宇宙の旅』より)

大胆予測・・・当新聞が予測する今年の変化と東北再興との関係

『コロナ禍の後に訪れる大変化は恐ろしい、しかし大チャンス?!』

【東北再興】もこの変化を無視できないし、むしろ活用すべき!

コロナ禍一色報道で見えなくなっている大変化の予感

東北再興を考えるときに、いま起きている世界的な変動の予感を無視することはもちろんできない。

よその世界の動きにすぎないので、東北にその波が押し寄せてくることはないから心配など、遠くの出来事と傍観していると、突然身の上降りかかってくるグローバルな時代なのである。

国内のTVやその他マスメディアが、コロナ禍報道で一色となっているため、完全に漏れている大変化の動きをしっかりと認識しないと大変なことになるであろう。

あらかじめ、大変化を予測し、対策を考えておかないと、コロナ禍終息後に大いに後悔しそうな流れが近くまで訪れているのを感じるのである。

いま起きている変化—経済の変化—

コロナ禍で世界の市場経済が大きく縮小しているにもかかわらず、世界的な株高現象である。

理屈に合わないことが世界的に起きており、日本も例外ではない。

その裏付けである世界的な金余り現象は留まることを知らない。そして、「株式市場の次」を狙っているのである。

ある程度価値が上昇したら、ハゲタカのように次のターゲットを求めて、あちこち迷い歩くのがお金というものの宿命である。

その向かう市場の一つが「M&A」、企業買収である。すでに、世界の大手のファンドが、巨額のファンドを組成して、コロナ禍で傷んだ日本の企業を「M&A」しようとして待ち構えている。

すでに新聞にはその動きが出てはいるが、見逃しそうな小さい記事であり、コロナ禍に比べたら無いに等しい扱いである。

まずは大手企業から

巨額のファンドはいきなり小さい企業は狙わない。まずは、資金のスケールメリットを活かして、大きな企業を「M&A」しに動く。その動きが一段落したら、「仕上げ」として、中堅・中小企業にシフトしていくのが常である。

日本の企業は優秀で潜在能力があるが、世界的株高の流れのなかでも無視され続けてきた。

その理由のひとつと考えられるのは、「出来るだけ安く買いたい」からであると推察できる。

東北の有力企業は自分の会社を正当に評価できているだろうか?

いま、アメリカあたりで話題となっている新興企業の「ユニコーン」などは、ビジネスモデルとしてはシ

ンプルすぎて面白みが少ない。

世界から金が集まるから株価も高くなるのであって、企業の未来が明るいから上がるとは限らない。

そこで、一転して、この波が東北にやってきたらどうなるだろうか。

巨大マネーに蹂躪?

見たことも、聞いたこともない、海外の巨大ファンドから「M&A」を仕掛けられたら、東北の企業はどう立ち向かうのだろうか? 免疫も対策も何もないところに、虚を突かれたように戦いを仕掛けられたらどうするのだろうか?

相手は百戦錬磨の専門家集団である。並大抵の戦術では戦えない。最初から負けが決まったようなものだ。こうしたことは取り越し苦労だ、来るわけがないなどとのんびり構えてはいけ

ない。相手はすでに「研究」を開始している。どの企業がうまさうかと価値を評価しているかもしれない。

したがって、今から「勉強」と「対策検討」をお勧めする。

そうしないと、気づいたときには、東北の有力企業のほとんどが外国資本に乗っ取られているかもしれないのだ。

政治も大変化

いまの国内政治を見て、嘆いているばかりでは手遅

れになるかもしれない。

今の国内政治の状況を見て、「チャンス」と捉えて、何かを仕掛けようと思う勢力はあるはずだ。

この点は歴史と海外に学ぶべきである。

時の政治に不満が高まりすぎて、「反対の極」に世論が傾いていくのは、これまでもたびたびあった。

今のトランプ政権に代表されるアメリカ政治の結末もそうやって始まったのではないか。

少し前だと、ナチスの台頭もそうであった。

国内経済に行き詰まり、国際的な包囲網でがんじがらめになっていた往時のドイツ国民が望んだのが「ヒトラー」だったことは知られている。

いきなりユダヤ人大量虐殺を挙行したわけではない。国民の不満を受け止め、そのエネルギーを、何かの「敵」を見つけて発散させた挙句、そうした蛮行に及んだのだ。

日本ではどうだろうか? 先の敗戦に突入する前もそうではなかったか。ドイツと似たような状況ではなかったか?

現代に話を戻すと、既存政党はどれもこれもすっかり国民から遊離している。これまではまあ仕方ないかとあきらめていた国民も、自分の生命と財産が脅かされるとなれば話は別だ。

そして、この遊離状態を利用しようとする勢力が秘密

裏に何かを企んでいる可能性は十分にある。

東北で、「復興」もままならないところに、コロナ禍の打撃が加わり、より困窮したら、こうした勢力の思うツボである。

だからこそ、経済の立て直しは重要なのである。お金のためだけに注意されたし。

地方分権

今般のコロナ禍騒動で、各都道府県の中央政府への不満度合いはより大きくなったのは事実である。

もう中央集権体制は崩してもいいのではないかの声はますます大きくなっているに違いない。

ならば、再び「道州制」の論議を復活しようかという動きが出ては少しも不思議ではない。

すでに内々ではスタート

しているかもしれない。

そこに、大手企業の地方移転が次々に加わると、この動きは加速していく可能性がある。

地方に雇用と税収が見込めること、中央に財政的に依存するから解放されていくからである。

また、大都市圏のメリットはすでに大きく棄損している、むしろこのコロナ禍ではデメリットの方が大きい箇所も出てきた。

この点でも大都市圏が現在より小さくなり、地方にシフトする流れが加速することが予想される。

これらを眺めてみると、東北再興にとっては願ってもない好機到来である。

早速、その準備に取り掛かる必要があると考える。みすみす、他県にこの好機を奪われてはならない。

マスメディア革新

コロナ禍によって、大手TVの自粛による出演機会の減少、演劇やイベント開催自粛で出番が消滅したタレント・芸能人が、揃って「YouTube」に個人チャンネルを開設した。

そして「YouTube」チャンネル「花盛り」となっている。

それがきっかけとなって、TVを見る人はますます減少して、広告料も激減して行き、メディアの主役が確実にネット世界に移行しようとしている。

若年世代ではすでに始まっているこの流れが、中高年にも拡大して、いよいよメディアの主役の交代が迫ってきている。

ネットであれば、どこにいても接続できる。このメリットを東北再興

に活用しない手はない。

県を挙げて、ネットTVを立ち上げた茨城県例もある。

「全国人気最下位県—茨城県」は、今や、県を挙げての大PR作戦で成功を収めているのだ。

これを見ても、やろうと思えば何でも出来る時代に、やっとなり移りしてきたのであることを実感する。

よそ事だと思わずに、ぜひ東北でも積極的に取り組んで欲しい。

かつてのような手法ではない、新たな「東北再興」の手法をさまざまな角度から検討して、未知の分野だからと尻込みしなければ、確実に「成果」が期待できる時代に入ってきたのだ。

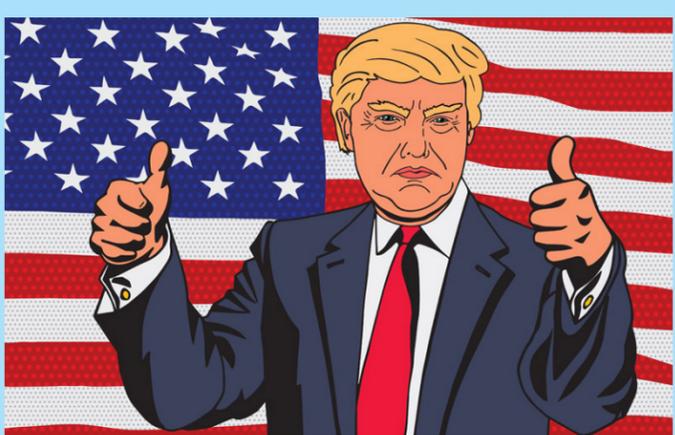
「チャレンジ精神」、「新しいもの好き精神」さえあれば、なんでもできると初激励したいと心から思う。

ハゲタカファンド

安値で買い叩いた株式や債券などの資産を高値で売り抜いて、巨額の富を得るファンドの総称。



ハゲタカファンド



トランプ